

草津白根山の火山活動解説資料（平成 26 年 7 月）

気象庁地震火山部
火山監視・情報センター

3月上旬から湯釜付近及びその南側を震源とする火山性地震が増加し、地殻変動観測によると湯釜付近の膨張を示す変動が認められています。東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス成分にも活動活発化を示す変化がみられています。また、全磁力観測による5月以降の湯釜近傍地下の温度上昇を示すと考えられる変化は小規模なものであったとみられ、7月以降は停滞しています。

湯釜火口から概ね1kmの範囲では、小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石が風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがありますので、注意してください。

6月3日に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを1（平常）から2（火口周辺規制）に引き上げました。その後警報事項に変更はありません。

活動概況

- 地震や微動の発生状況（図1、図2、図3 - ）

3月上旬から湯釜付近及びその南側を震源とする火山性地震が増加し、その後、消長を繰り返しながら多い状態が継続しています。23日から24日に、湯釜付近を震源とする振幅の小さな火山性地震が増加しましたが、火山性微動は観測されませんでした。

- 地殻変動の状況（図3 - ~、図4、図9）

GNSS¹⁾連続観測では、4月頃から湯釜を挟む基線でわずかな伸びの傾向がみられます。

8~10日にかけて実施したGNSS繰返し観測では、前回の観測（2013年9月26~30日）以降伸びの傾向への変化が認められました。

- 山体内の熱の状況（図10~図14）

全磁力²⁾連続観測で、5月頃からみられていた湯釜近傍地下の温度上昇を示すと考えられる変化は、小規模なものとみられ、7月に入ってから停滞しています。

- 火山ガスの状況

東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス成分に活動活発化を示す変化がみられています。

- 噴気など表面現象の状況（図5~図8）

10日に実施した赤外熱映像装置³⁾による現地観測では、水釜火口内北東斜面と水釜火口北側の噴気温度は、前回（2013年11月5日または9月27日）の観測と比較して高温領域の分布に特段の変化は認められませんでした。

奥山田（湯釜の北約1.5km）に設置してある遠望カメラによる観測では湯釜北側噴気地帯の噴気孔から弱い噴気が認められました。また、逢ノ峰（湯釜の南約1km）に設置してある遠望カメラによる観測では、今期間、視界不良のため不明の期間が多くありましたが、噴気は認められませんでした。

湯釜火口内に設置してある東京工業大学のカメラでは、火口内に特段の変化は認められませんでした。

- 1) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。
- 2) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定されます。
- 3) 赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感知して温度を測定する測器で、熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の温度より低く測定される場合があります。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 26 年 8 月分）は平成 26 年 9 月 8 日に発表する予定です。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、関東地方整備局、東京大学、東京工業大学及び独立行政法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『2万5千分1地形図』『数値地図25000（行政界・海岸線）』『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平23情使、第467号）。

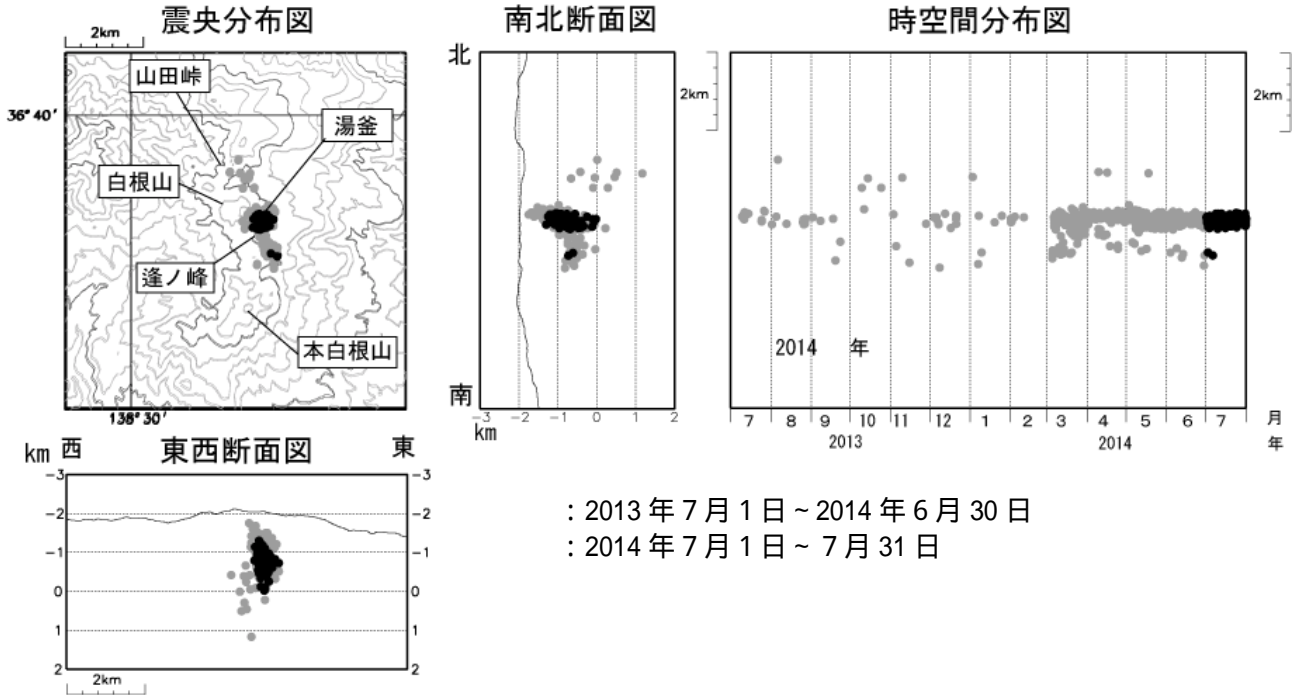


図1 草津白根山 震源分布図(2013年7月1日~2014年7月31日)

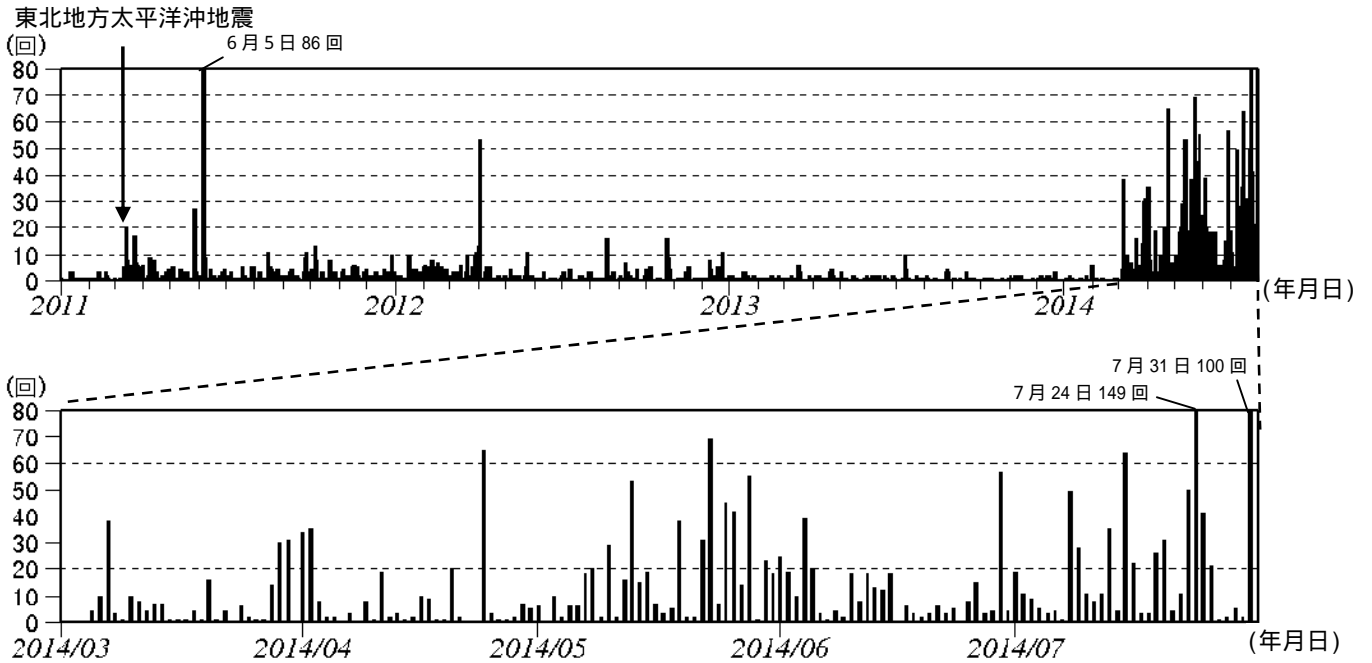


図2 草津白根山 日別地震回数(2011年1月1日~2014年7月31日)

・2014年3月上旬から湯釜付近及びその南側を震源とする火山性地震の多い状態が続いています。

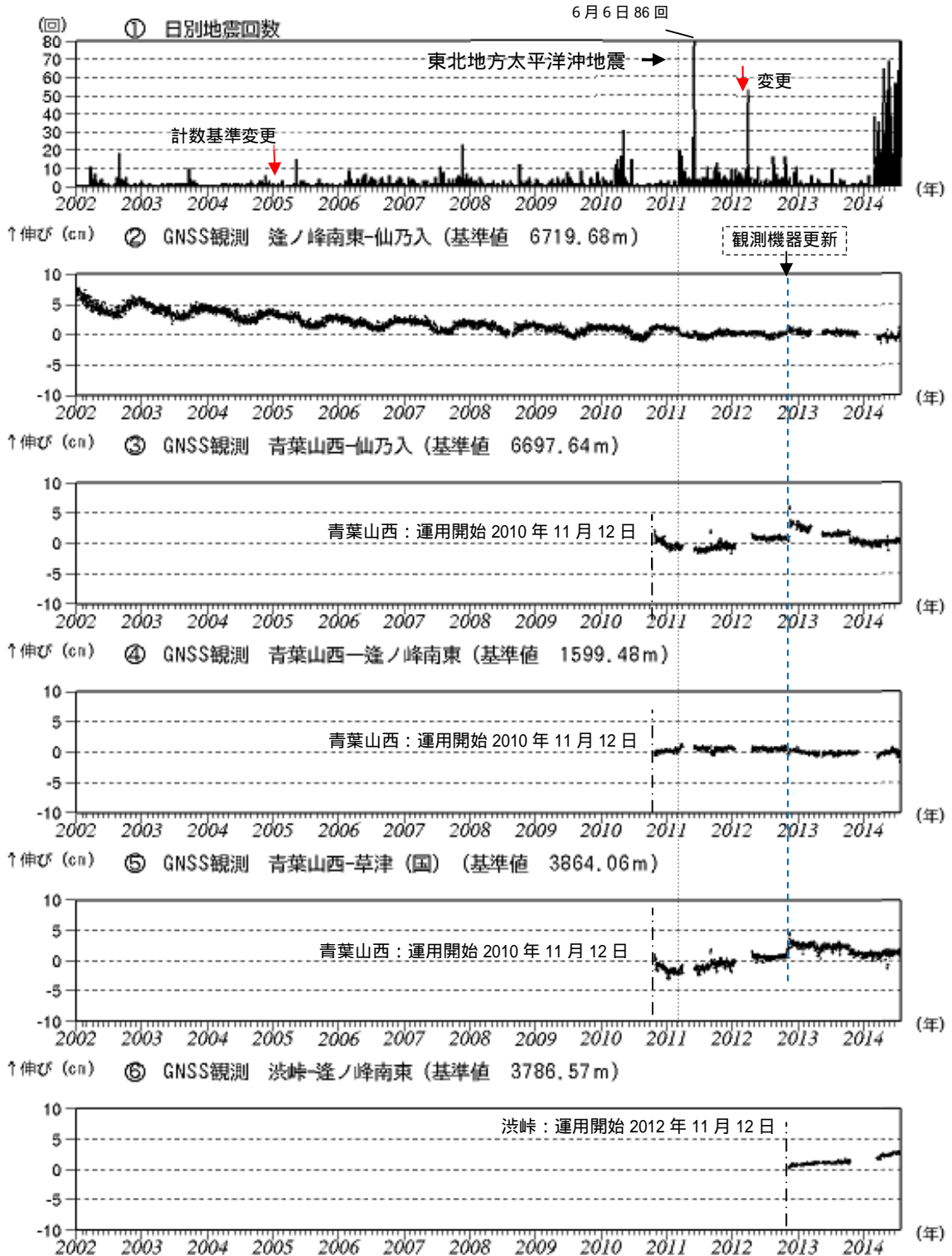


図3 草津白根山 火山活動経過図 (2002年1月1日~2014年7月31日)

山体付近で発生した地震の日別回数

検測基準(赤矢印は計数基準変更時期を示します)

- ・2005年1月21日まで: 水釜北東振幅 $0.05\mu\text{m}$ 以上、S-P 2秒以内
- ・2005年1月21日(変更): 検測対象波形を変位から速度に変更
- ・2005年1月21日(変更)~2012年2月29日: 水釜北東振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 、S-P 時間 2秒以内
- ・2012年3月1日(変更)から: 水釜北東振幅 $1.0\mu\text{m/s}$ 、S-P 時間 1.5秒以内

~ GNSS連続観測による基線長変化(国): 国土地理院

- ・湯釜を挟む基線 でわずかな伸びの傾向がみられます。
- ・2010年10月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。
- ・の基線長変化にみられる冬季の伸びと夏季の縮みの傾向は季節変動による変化です。
- ・には東北地方太平洋沖地震(2011年3月11日)に伴うステップ状の変化がみられます。
- ・ ~ は図4の ~ に対応しています。グラフの空白部分は欠測を示します。
- ・青い破線で示したデータの乱れは観測機器の更新によるものです。

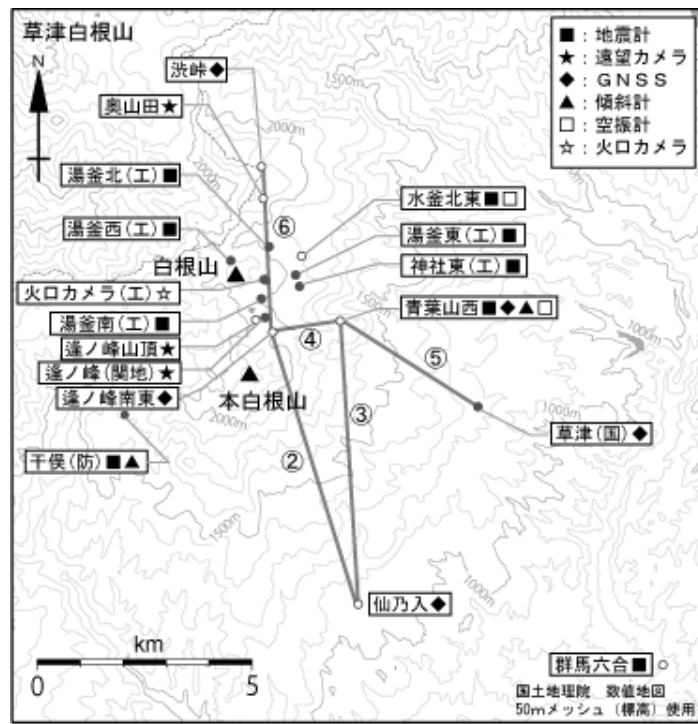


図4 草津白根山 観測点配置図

GNSS 基線 ~ は図3の ~ に対応しています。



図5 草津白根山 湯釜付近の状況

- ・左上図：奥山田の遠望カメラ（7月30日撮影）
- ・右上図：逢ノ峰の遠望カメラ（7月30日撮影）
- ・左下図：東京工業大学火口カメラ（7月30日撮影）



図6 草津白根山 湯釜周辺図
 ▼: 撮影方向

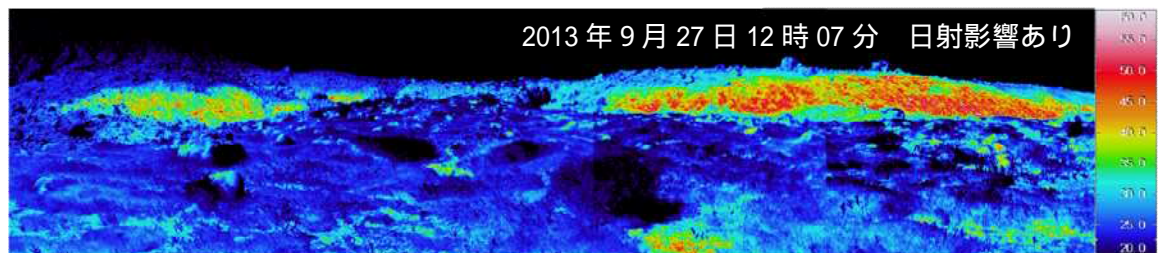
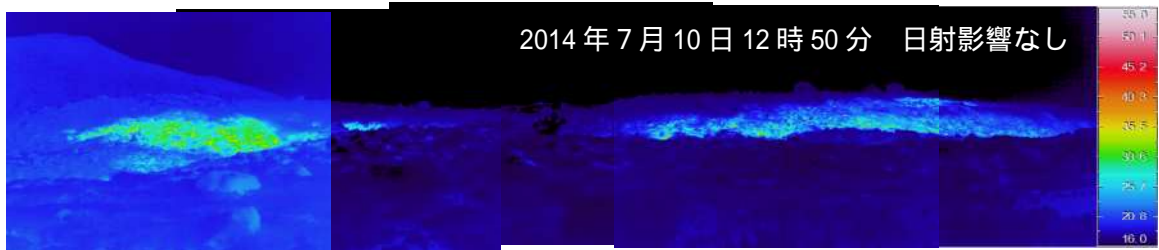
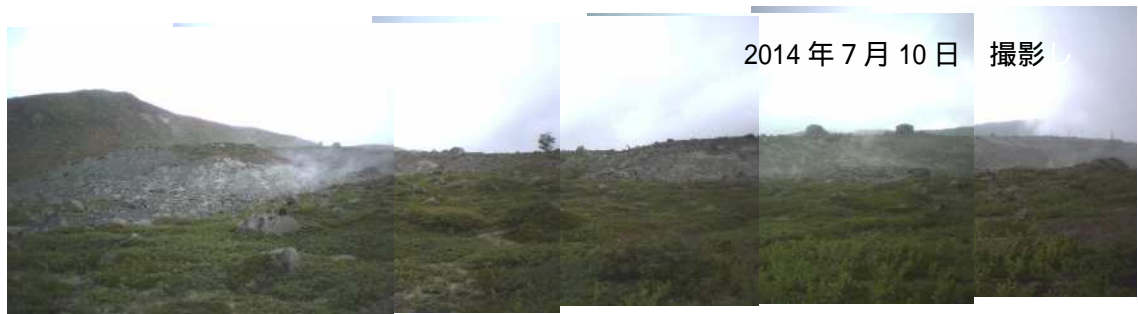


図7 草津白根山 北側噴気地帯周辺の状況及び地表面温度分布
 ・前回(2013年9月27日)は日射の影響により温度上昇部分があります。
 ・前回(2013年9月27日)と比較して高温領域の分布に変化はありませんでした。

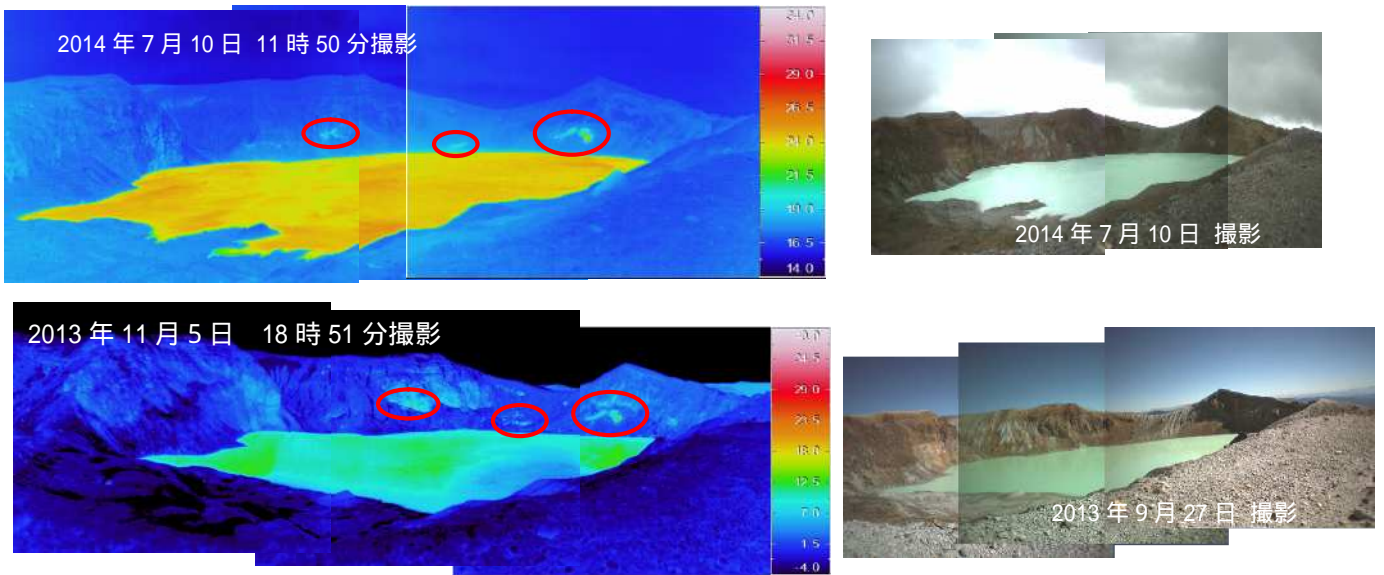


図 8 草津白根山 湯釜火口内の状況

- ・赤線内が高温領域を示しています。
- ・前回(2013年11月5日)と比較して高温領域の分布に変化はありませんでした。

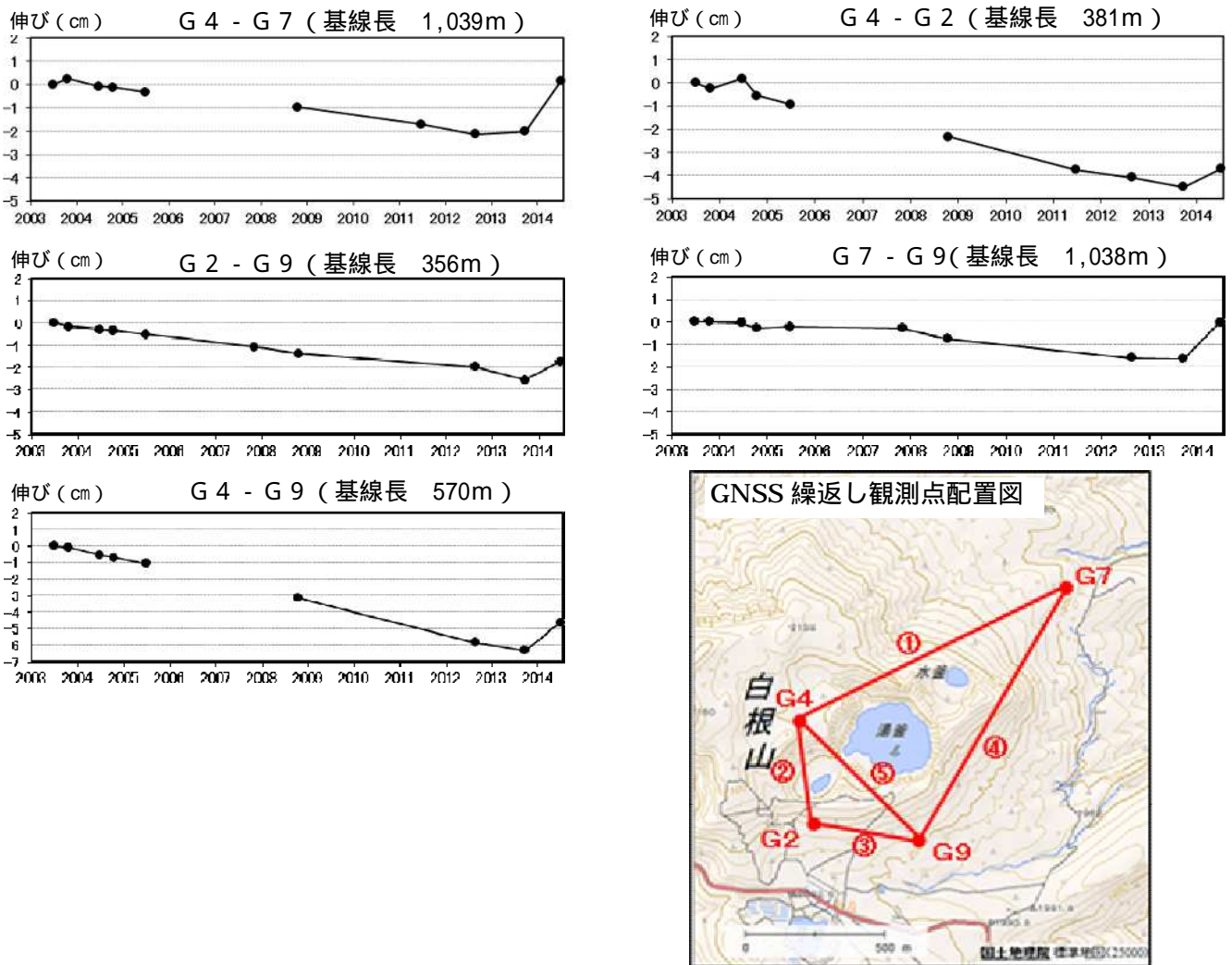


図 9 草津白根山 GNSS 繰返し観測結果

- ・GNSS 基線 ~ は地図の GNSS 基線 ~ に対応しています。
- ・前回の観測(2013年9月26~30日)以降伸びの傾向への変化が認められています。

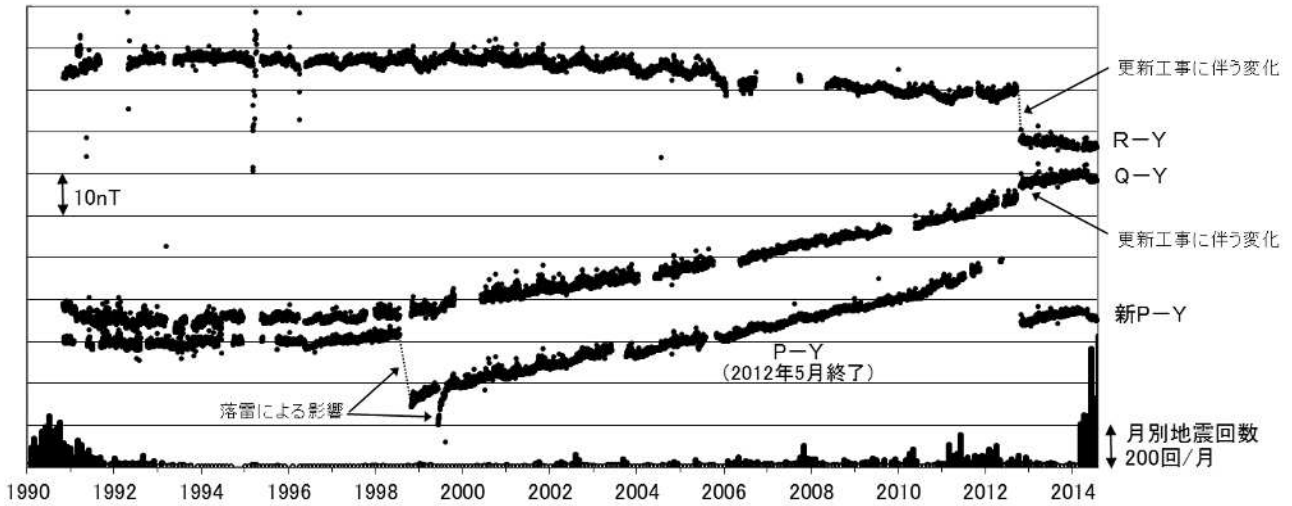


図 10 草津白根山 全磁力連続観測による全磁力値の変化及び月別地震回数(1990年～2014年7月26日) 連続観測点 P、Q、R および新 P における八ヶ岳地球電磁気観測所(東京大学)(Y)との全磁力の夜間日平均値差。最下段は草津白根山で観測された月別地震回数を示しています。

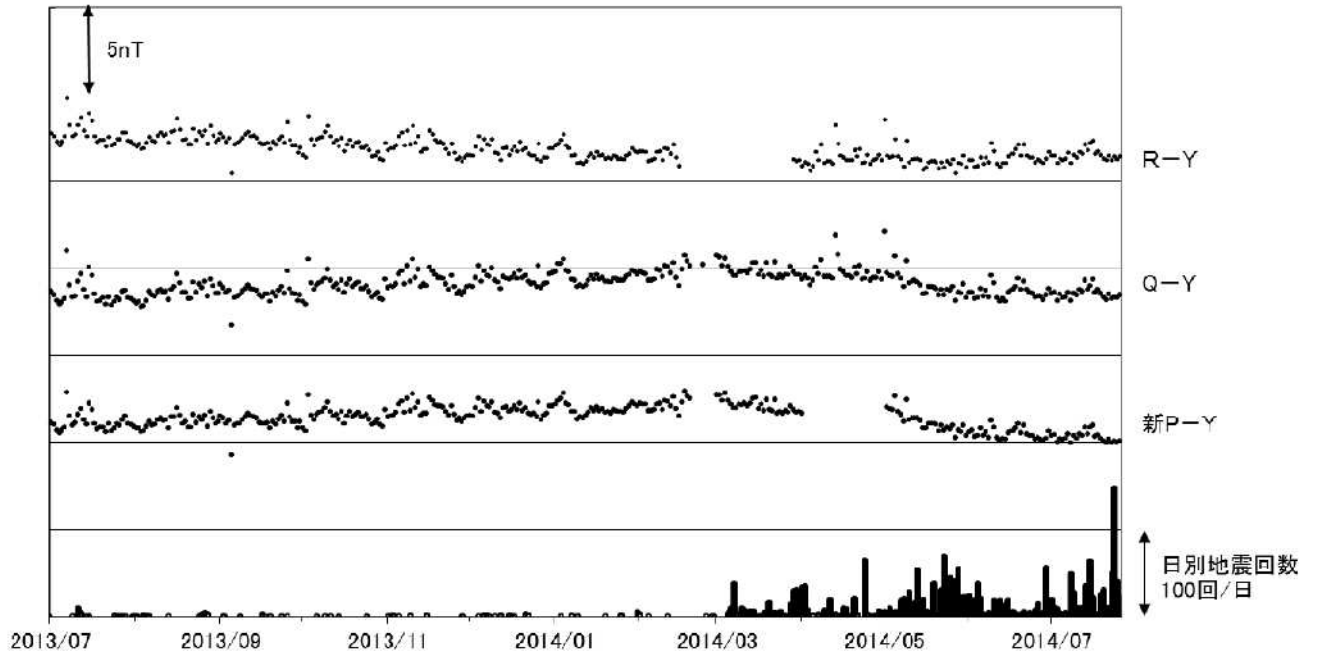


図 11 草津白根山 全磁力連続観測による全磁力値の変化及び日別地震回数(2013年1月～2014年7月26日) 連続観測点 P、Q、R および新 P における八ヶ岳地球電磁気観測所(東京大学)(Y)との全磁力の夜間日平均値差。最下段は草津白根山で観測された日別地震回数を示しています。

- ・2014年5月頃からみられていた湯釜近傍地下の温度上昇を示すと考えられる全磁力変化は、小規模なものであったとみられ、7月に入ってからは停滞しています。

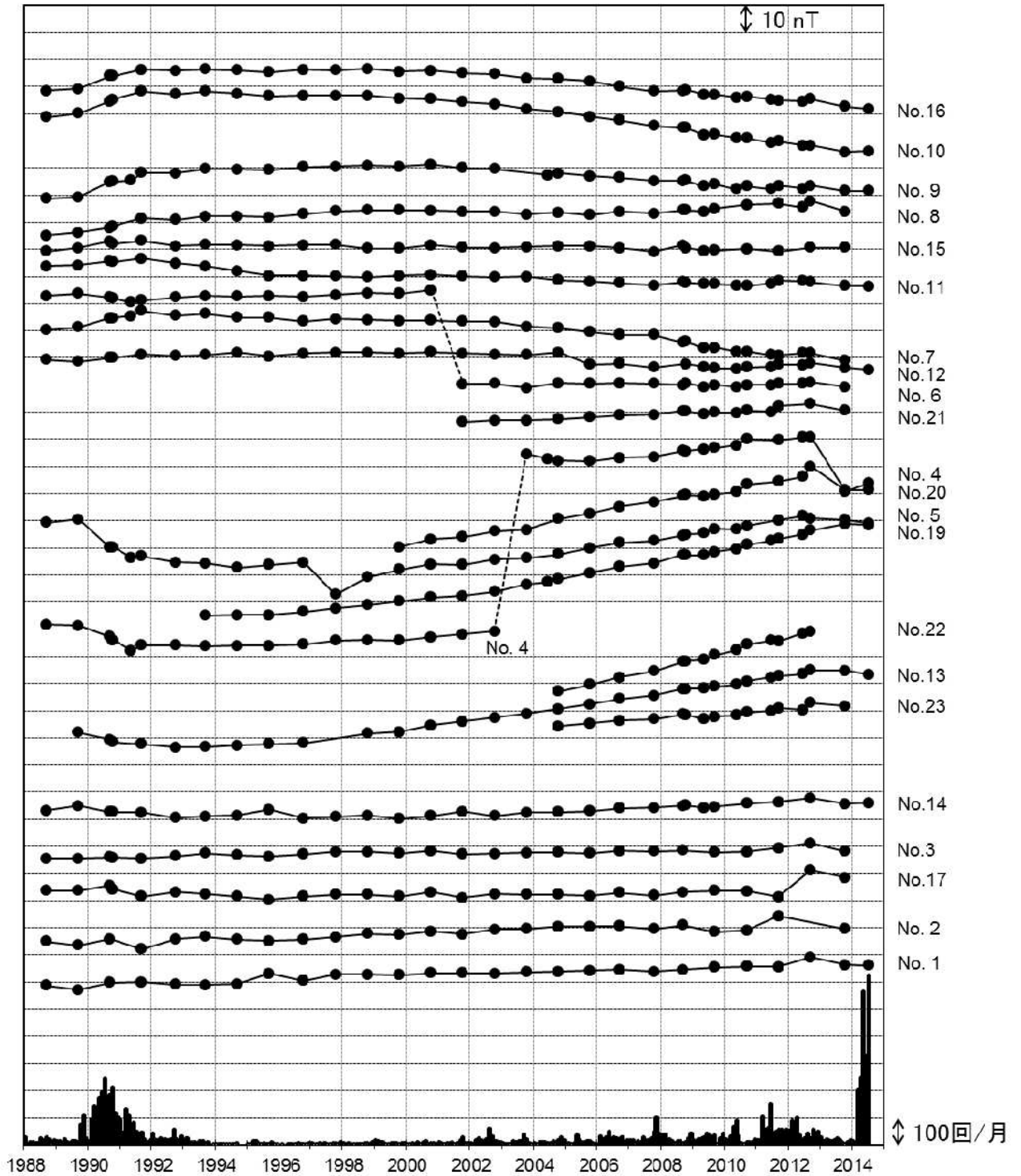


図12 草津白根山 全磁力繰り返し観測による全磁力値の変化(1988年9月~2014年7月)
 八ヶ岳地球電磁気観測所(東京大学地震研究所)で観測された全磁力値を基準としており、草津白根山と八ヶ岳の地域的短周期変動の差は草津連続観測点を介して除去しています。最下段は草津白根山で観測された月別地震回数を示しています。
 7月9日~10日に繰り返し観測を実施しましたが、前回(2013年10月)と比較して特段の変化はみられません。

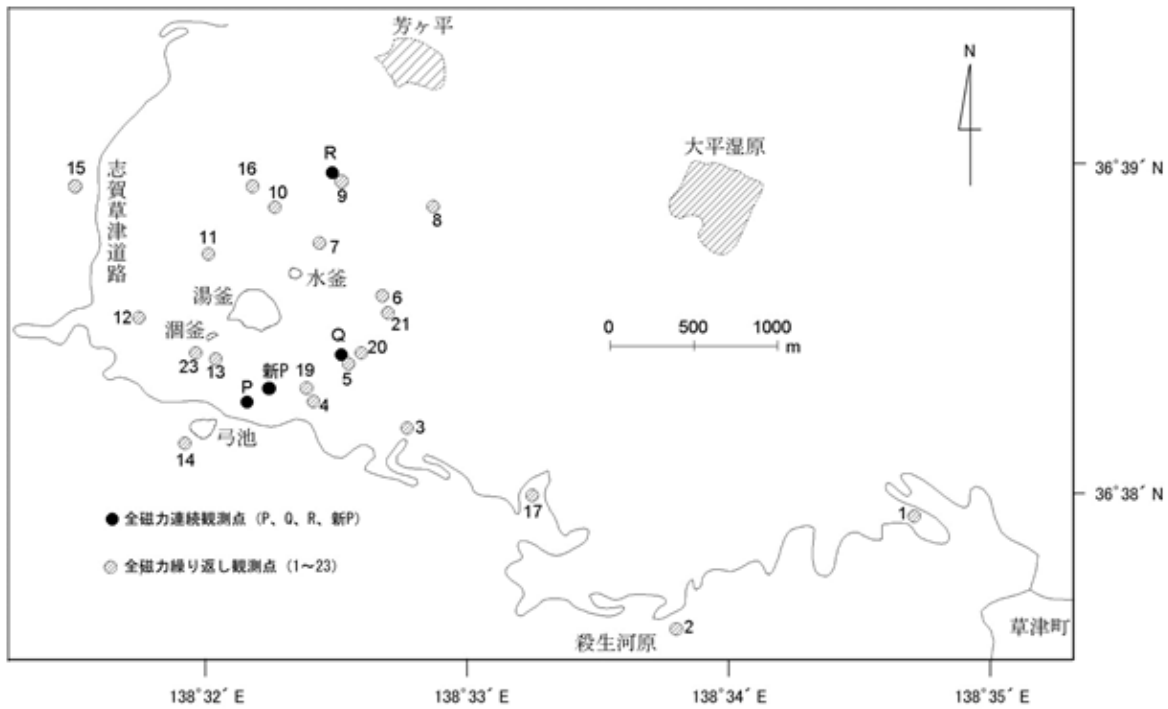


図 13 草津白根山の全磁力観測点配置図

【参考】全磁力観測について

火山活動が静穏なときの火山体は地球の磁場（地磁気）の方向と同じ向きに磁化されています。これは、火山を構成する岩石には磁化しやすい鉱物が含まれており、マグマや火山ガス等に熱せられていた山体が冷えていく過程で、地磁気の方向に帯磁するためです。しかし、火山活動の活発化に伴い、マグマが地表へ近づくなどの原因で火山体内の温度が上昇するにつれて、周辺の岩石が磁力を失うようになります。これを「熱消磁」と言います。そして地下で熱消磁が発生すると、地表で観測される磁場の強さ（全磁力）が変化します。これらのことから、全磁力観測により火山体内部の温度の様子を知る手がかりを得ることができます。

例えば、山頂直下で熱消磁が起きたとすると、火口の南側では全磁力の減少、火口北側では逆に全磁力の増大が観測されます。この変化は、熱消磁された部分に地磁気と逆向きの磁化が生じたと考えることで説明できます。図11に示すように、山頂部で観測した全磁力の値は、南側Aでは地磁気と逆向きの磁力線に弱められて小さく、北側Bでは強められて大きくなるのがわかります。

ただし全磁力の変化は、熱消磁によるものだけでなく、地下の圧力変化などによっても生じることがあります。

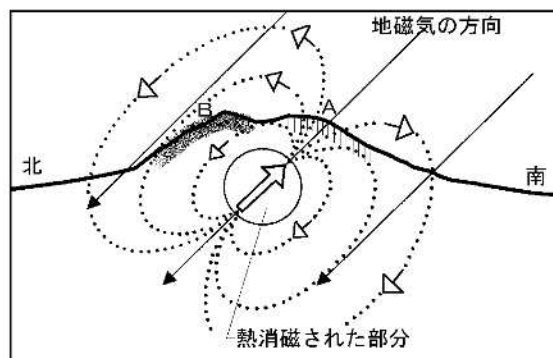


図14 熱消磁に伴う全磁力変化のモデル

火山体周辺の全磁力変化と火山体内部の温度

- | | | | |
|------------------------------|--------|---|-------------------|
| 北側の観測点で全磁力増加
南側の観測点で全磁力減少 | [消磁] | → | 火山体内部の温度上昇を示唆する変化 |
| 北側の観測点で全磁力減少
南側の観測点で全磁力増加 | [帯磁] | → | 火山体内部の温度低下を示唆する変化 |